
カフ流・格言のための斜め読みコウサツ

月野 後歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カフ流・格言のための斜め読みコウサツ

【Nコード】

N4422C

【作者名】

月野 後歩

【あらすじ】

カフの頭を開いて覗いたような、そんなエッセイ群です。ご興味のある方は、是非にご一読。

イントロデュクシオン

後歩と書いて、カフと名乗っているくらいですから、俺って、カタカナが大好きなんですよ。

だから、考察を「コウサツ」としたのは、そういう嗜好性によるところも大きいのですが、真意のほどはまあ、まだ説明するには及ばないでしょう。

ともかく、色々の格言について、カフ流の深読みで読み直してみよう、というのが当エッセイの狙いです。

小説家、と文学者、を区別する俺にとっては、これもきつと、文学者向けのものとなってしまいうでしょうが、

しかし、ともかくどちらにせよ、重要なのは猜疑心だと思っております、

だからこそ、昔の文学者の類は世間から軽蔑された、というのも一つにはあります。

斜に構えるヤツってのは、いつだっていけすかねえものでありますからね。

短いながらの、イントロデュクシオンでありました。

では、参りましょう。

「健全なる肉体に健全なる精神は宿る」

はつきり言いまして、大嫌いな言葉です。

そもそも、何が健全であるかも分からない世界にあつて、適当にも程がある格言でありまして、

つまりはそれだけ、この言葉の出来た古代ギリシャと言うものが、平和に満ちていた、ということでありましょう。

といって、ギリシャの頃にも戦争と言うものが存在したのは確かで、プラトンを讀んだことのある人ならご存知のことと思うが、有名なところで「ペロポネソス戦争」というものがあつた。

アテネとスパルタの二大巨頭による、大戦争でありました。

スパルタは質実剛健たる尚武の国で、昨今までは「スパルタ教育」

なんて言葉が使われていた通り、

青年諸君には一定期間の厳しい兵役が課せられておりました。

小説をお薦めするならば、三島由紀夫の「禁色」の全編に、その様子が散りばめられております。

一方、アテネは「知」をよしとする国で、軍部もあつたにはあつたが、これよりは大らかであつたことでしょう。

しかし、軍隊が存在するくらいですから、ペロポネソスは規模こそ全ギリシャを揺るがしこそすれ、

その他にも小さな戦争は、いくらでもあつたに相違ないのです。

喉元過ぎれば熱さを忘れる、なんて、人間の真理をつきすぎていて、逆に痛々しい言葉がありますが、

それでも、同じ人間です、戦争があつて、「よっしゃ、これからもバリバリ攻めるぞ！」なんて言うヤツはそうそう見られない。

まして、かつての日本人じゃあるまいし、天下のギリシャ人であり

ますから、平和への意識は皆、高かったろうと思われるのです。

といって、現代の日本を見れば分かる通り、平和になると、今度は一転ノイローゼになりがちで、中々上手くいかないサジ加減であります。

説明が長くなりましたが、そういうわけで、この格言は、こういう時期に発生したものではないかな、と、俺は思うのです。だから、嫌いなんですね。

そこで、まず、俺の体験談を載せましょう。

こう言くと、歳がばれてしまうから嫌なのだが、事実です、つい二ヶ月前のことでした。

俺も、ようようアルバイトを始めたんですね。

初めの頃など、仕事に慣れないため、異常に疲れる毎日でした。

小型のスーパーのようなお店でのアルバイトなのだが、商品の陳列を終えますと、今度はレジに入り、

オバサンに罵倒され、先輩には迷惑がかかる。加えて、足が棒になつてしまう。

クーラーの目の前にレジが据えてあるため、涼しいは涼しいけれど、三時間もすれば喉が枯れ、

目が乾き、肩が凝り、拳句、

「ありがとうございますー！！」と言えなくなるのである。

「あつとつごらつらー！！！！」

滑舌が悪くなるのである。勢いで誤魔化すのが精一杯、うむ、自慢にもならぬが、若い故に、元気だけが資本。

技術も何も、至りませーん、ごめんちゃいorz という具合であります。

まあ、モノカキの性^{さが}で、多少大袈裟に書いた嫌いはあるが、

たかが時給650円前後の仕事なんて、こんなもんだ、というのが、先輩のご意見であります。

しかし、それにも増して重大な危機が迫っていたのは言うまでも無いのです。

何かと申しますに、「達成感」です。

何てことでしょうね、疲労さえもが心地良くなってしまふのです。

仕事終わりには、しばらく顔が緩みっぱなしです。『ああ、楽しかったな』と、

酷ければ一人、うわ言のように呟いておるわけです。

嗚呼、いけません。いけません。

……え、どこがどうしていけないかって？

そりゃあ、ああた。俺はね、文学青年なんですよ。

堅苦しいところから説明すれば、欲望の基本原則は、欠乏をこそ望む、ということです。

「達成感」とは、つまり、欠乏の満たされた状態に「達成」しているからこそ、それ以上を望まない点において危険なんですよ。

高慢が嫌われるのと、理由は同じです。

事実、文章を書こうと思えなくなっていましたからね。

何故って、まず、疲れてるのに、書く気なんて起きるはずがないですし、

そもそも、今現在が楽しいとなると、仕事についてのアレヤコレヤについては思い浮かびこそすれ、

創作ノートをまとめる気なんて起きないのが人情です。

大体、不健全なことなんて、考えられなくなってしまうのです。

俺にとっては、欲望云々以上、こちらの方が重要でありましょう。

そう、十全な愉悅に浸っていると、悪さをする気が起きなくなってしまう。

下衆な考えが浮かばなくなってしまう。

カフから、下衆（guess）を差し引いたら、一体何が残りましよう？

「甲羅を噛む」には、残酷な描写をほんの少量加えたが、あれは完全に、バイトが休みの日に書いたものです。

仕事という、社会に対しての奉仕行動を行ってホウホウの体になりながら、

片一方であんな、自己完結の戯画（あるいは、「堅実」の正体）を描けるのは、はっきり言って、

相当、表裏のある、よく言って出世できるタイプ、悪く言えば、よほどの悪人なのでしょう。

（だからこそ、サラリーマンをしながら執筆したカフ力は凄い、とも言えるが）

俺は自分について、さんざ悪ぶってみた過去もあったけれど、結局残念ながらそんな素養なんてない、と見切りをつけてしまいましたから、

だから、休みの日に執筆するに限るな、と。

ウダウダと書いてしまいましたが、つまり、俺にとっては不健全こそが資本なのであって、

肉体を動かすと、ストレスやら何やら、悪魔の秘薬作りの原料が根こぎになってしまっ

て、最悪、心が非常に晴やかになってしまう。

母に言われました。「前に比べて、ずっと健康的じゃん」

そうではない。俺はもっと、色々のことを書かねばならない。

恋愛のこと、学問のこと、汚職のこと、精神のこと、ともかく色々です。

そうになると、どうしても恋愛について欠乏を感じなければならない。
綺麗な恋愛を望むのは、童貞か、人擦れしすぎたドン・ファンのい
ずれかで、
片一方は知らないがため、もう一方は得られなかったがために、で
す。

だから、そういう欠乏をどこでも良くしてしまう労働なんて、俺は
認めない。

まして、人類を一定の水準の元、押し付けがましい「健康」なんて
概念に導こうなんて、

俺は断固として、認めるわけにいかないのです。

瓢箪から駒、不健全なる精神からの言葉でありますが、

それでも、「自由」への希求に繋がったのだから、あながちそう不
健全でもなさそうなのだが、

ああた、いかがお思いです？

「臭いものにフタ」

江戸時代の悪しき慣習として、現代に伝わるコトワザであります。臭いものにはフタをしろ、と。

フタをしないと臭くて仕方がないんじゃない、と。

臭くて仕方ない、近所迷惑も良いところだわ。そうよ、市役所に訴えてやれば……と、

まあ、これは違うにしても、

ともかく、あまり汚いモノに関わりたくないのが人間であって、フタをしてでも断固拒否！ という姿勢がよく表れています。

あるいは、この姿勢こそが「悪」とみなされる由縁であって、

臭いものにフタをすると、科学の発展した現代に、メタンガスというものはよく知られたところで、

フタの下にて「臭いもの」はじゃんじゃん腐敗し、かかるガスが充滿、いつかは破裂を来たすのである。

大体、押さえた勢い、強くなってしまうのは何についても言えたことで、フタが木製ならばまだしものところ、

鋼鉄製の、強盗か何かから守るんかい、くらい強力なフタを当ててしまえば爆発の威力も凄まじくなってしまうのであり、

これが糞尿であれば、如何ほどばかり悲惨たるか、想像するだけで笑え……じゃなくって、想像するだけで恐怖の一言。

何せ、科学と同様にして、ジャーナリズムも発展していますし、翌日には大見出しで「ウ コ大爆発」の記事が載るに違いなく。

下ネタに走るなど「芸」という長く険しい道においてサイテー極まりないけれど、例を示すならば、某精肉会社の偽装事件がそうであったのは言うまでもないし、

政治家と裏金の問題も、全てここに帰結しているでしょう。

誰も、まさか、「食べようと」するものを疑うのならまだしも、一度これが、「食べてしまった」ものを疑うなんて、中々出来たことではないのです。

そういう弱さ、「まあ、大丈夫だろう」という楽観的観測（measurement）に対するhope）が、かの社長を傲慢にさせたのは言うまでもありません。

フタをする、とは、考えないようにする、ということであるけれど、その実、それこそが相手方（ウ コ）の思う壺なのです。

だって、フタをしてしまつては、こちらから向こうの様子なんて、全く分らない。

いえ、分らないどころではなくて、むしろ、静か過ぎるとさえ思つてしまうでしょう。

フタはそもそも、臭いものを隠しているが故にフタであるのに、これは本当に、忘れるに容易い理屈です。

マンホールを道路の一部のように認識してしまいがちだが、とんでもない、道路の一部のようできて、結構な深さの穴ぼこなのである。落ちては生半可な怪我では済まないのだが、それも、マンホールがあんまり頑丈だから、すっかり忘れてしまう。

まさか、マンホールが壊れることなんてないんだし、落つちて怪我をすることなんて考える必要も無いだろう、と。

そうやって思つてしまえば、いくら意識してみたつてフタはフタ、それ以上の何ものでもありません。

マンホールは「怪我をしないためのフタ」ではなく、道路の一部となり、

「臭いものを覆うためのフタ」は、何か変なニオイのする板となり、（これは、国内のニースではないけれど）「頑丈で茶色い紙の箱」に至つては、何の変哲も無い肉まんとなるのです。

さて、少し話を戻すと、一方で相手方は「考える必要も無いだろう」と、こちらが考えてしまうことについては重々承知なんですね。好き勝手に悪さを働くのです。

果ては、図に乗りすぎた勢いで大爆発、こちらも、やり場の無い怒りに襲われる。

どうして、「やり場の無い」怒りなのでしょう？

それは、単純なことです。

こちらの勘違いで、「静か過ぎる」と思っていたものが裏切られたのが一つ、

そもそも、その「静か過ぎる」という認識自体が、どうにも俺たちの落ち度だったんじゃないの？ というのが二つ、

つてか、最初っからフタなんてするんじゃないやねえよ、誰だよ、フタなんてしやがったの！ というのが三つ、

しかし、よくよく考えてみたら、そもそもフタをしたのはどうにも自分らしく、

ここは大っぴらに怒ってしまうと、自分自身、危ういんじゃない？

というのが四つ、という具合です。

よって、怒るにも怒れない。

政治家の不祥事なんかに同情的になってしまいう方というのが、街頭インタビューに登場しないクセ、割と多いような心持ちだが、どうしてそのようになってしまふのかと言えば、以上の経路でもって、自らの落ち度を認めてしまふ優しさにあるだろうと思われます。

しかし、それではいけません。

はい、何かの決り文句のようではありますが、それでもゴホ、いけない、と言い切って見せましょう。

まず第一、フタは、すれば良いと思うのです。
取っ払って良いものではないのです。

「何でやねん。フタなんていらへんわ」

なるほど、確かに、「悪しき習慣」とは、先に書いたことでした。
しかしね、それがどうして「悪」なのか、と言えば、

結局のところ、どうしてフタをしたのか忘れちまう部分、
そこにこそ、悪が悪たる由縁が潜んでいるのではないだろうか。

大体、「無礼講だ！」と、上司に言われたからと言って、
調子に乗って、彼のはげ頭をパツパツ叩き、「なあにが、部長だ！

この、タコがー！！」

アハハハアと笑った日にゃ、青筋立てて怒鳴られるのに相場が決ま
っているのです。

建前を、そのまま鵜呑みにしようとする傾向が、日本人にはあるら
しい。

そしてまた、その、鵜呑みこそ、美德のように思われている。

しかしまた、難しい話をしてみると、自我というのは二重化されて
いて、

「彼のことを信じてるの！」という主観があるかと思えば、
一方にして、

「私は、彼の実際を知っているが、それでも、建前を信じてやろう。
へッ、なんて美しいのかしら、私」
という客観も存在するのである。

だから、言葉と言つもの、易々と信じてはいけませんよ。

「臭いものにフタ」

なるほど、臭いものを隠す、ということ。

しかし、ともかく、何故隠すのかを、知っている。

この前提がないことには、即ち悪となりましょうし、

また、礼儀も何もあつたものではなくなくなってしまつのです。

「臭いものにフタ」(後書き)

ニュースが若干古いこと、お詫び申し上げますm――m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422c/>

カフ流・格言のための斜め読みコウサツ

2010年10月16日14時23分発行